曲目解説

モーツァルトは、ほぼ全生涯を通じて協奏曲を書きつづけています。早くも４歳で協奏曲の作曲をした、などと云う話もあります。現在残されている協奏曲は、およそ50曲に上っており、その約半数が独奏ピアノのための作品です。単に量的な問題としてではなく、ピアノ協奏曲はモーツァルトの活動の極めて重要な位置を占めています。

今回取り上げましたK.488の協奏曲は、1786年の3月から4月にかけて開かれた、合計3回の予約演奏会で弾くために作曲されたもののうちの一曲です。完成の日付は1786年３月2日。モーツアルトのピアノ協奏曲は傑作ぞろいですが、この曲はその中でも特に優れたものでしょう。

さて、これは余談ですが、姉のナンネルルは優れたピアニストだったようで、弟のピアノ協奏曲のいくつかは彼女によって初演されています。作曲の才にも恵まれていたらしいのですが、歴史の上では単に天才ウォルフガング・アマデウスの姉という立場に甘んじているのです。

1784年から２年ぐらいの間に、モーツァルトは12曲のピアノ協奏曲、交響曲38番「プラハ」、６曲の「ハイドン弦楽四重奏曲」などを書いており、このK.488の簡潔な書法のうちにも、当時の充実ぶりが窺われます。

歌劇もモーツァルトの力量が十二分に発揮された分野です。「フィガロの結婚」は、1786年４月、K.488とほぼ同じ時期に書き上げられました。ボーマルシェの戯曲（1781年作）をもとにロレンツォ・ダ・ポンテがオペラ用に脚色しました。ダ・ポンテはモーツァルトを高く評価していたようです。序曲は、ニ長調、２分の２拍子、ソナタ形式をとります。

６曲のブランデンブルク協奏曲――バッハにとって「６」という数は、どうでも良い数ではありません。それは、フランス組曲、イギリス組曲の数、無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータの数、等々――ある全体、完全なグループです。

この曲集は1721年３月、ブランデンブルク辺境伯クリスティアン・ルートヴィヒに贈られました。ブランデンブルク公は立派な宮廷楽団を持っておられましたが、1738年に公が逝去されると、当時の例によって楽団は解散させられ、不用な楽譜は紙くず同様に売り払われました。その中にこの傑作も含まれていたのですが、そのまま失われてしまわなかったのは全く幸いなことです。

これら６曲が全部長調で書かれていることは注目に価します。そして、短々長格のリズム（二つの短音と一つの長音）が、曲集に全体的統一を与える一方、各曲の曲想、構成、楽器編成は変化に富んでいます。この第４番では、ヴァイオリンとフルート（リコーダー）が独奏楽器として取り上げられています。

耳を病んだ音楽家、その辛苦は想像するに余りあります。自分の息子を「第二のモーツァルト」という金のなる木に仕立て上げようとした飲んだくれの父親が、幼い頃からベートーベンに課した苛酷な練習の御蔭で、耳が聞こえなくても作曲は出来たのですが、その事が、ベートーベンの幸福を保証しているわけではありません。音を失った彼には、心の中で音楽を奏でる以外になかった、という事を意味しているからです。

ベートーベンは、耳疾という、運命と戦い、これにうち勝ったのです。それは、己れにうち勝った、ということでしょう。そのベートーベンの性格は、「エロイカ」以後の作品に強く刻まれています。

管楽八重奏曲は、作品番号から予想されるのと違ってかなり初期のもので、1792年頃に作曲されたと云われています。当時流行のハルモニーの典型的な編成（２本ずつのオーボエ、クラリネット、ファゴット、ホルン）で書かれており、若いベートーベンの、性格というよりは、それ以前の内的素質といったものの窺われる作品です。